「危機対応学」を
これからいかに進めていくか

2017年4月18日

全所的プロジェクト・ワークショップ
玄田　有史

きき【危機】

たいへんなことになるかも知れないあやうい時や場合。危険な状態。（『広辞苑』第六版）

生命が脅かされ、そのものの存立・基盤などが危うくされるおそれの感じられる、絶対絶命の事態。ピンチ。（『新明解国語辞典』第五版）

それが個体であろうと集合体であろうと，有機体が，外部圧力あるいは内部矛盾によって，本来それに備わっているとされる機能の正常な運行がいちじるしく阻害され，有機体の存続そのものが危殆に瀕するような病態に陥ること。（『世界大百科辞典』第２版）

たいおう【対応】

①互いに向き合うこと。相対する関係にあること。②両者の関係がつりあうこと。③相手や状況に応じて事をすること。（『広辞苑』第六版）

①ある種類に属する一つひとつが、他の種類の一つひとつに対して決まった関係にあること。②二つの事物の間に均衡が保たれること。③状況の変化、それぞれの相手に応じて、それにふさわしい行動をとること。（『新明解国語辞典』第五版）

集合Aから集合Bへの写像fは，Aの各元aに，それぞれBの一つの元bを定め，$f(a)=b$と表すことができる。（『世界大百科辞典」第2版）

「危機は管理できない。
しかし、対応はできる。」
（西川一誠福井県知事）

「地図をつくる」

4つの視点
・事前と事後
・個別と集団
・確率と意識
・事実と言説

Scenario, ad lib, improvisation, play, and more

メリディアン180沖縄会議の様子（2016年7月）

危機対応学HPは以下で

危機対応　東京大学　検索

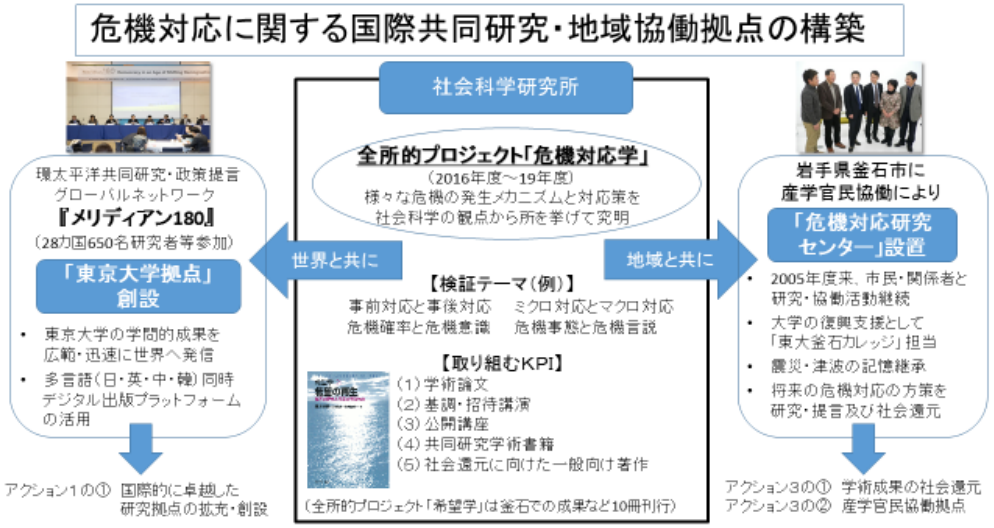
憲法改正、レアアース、市民運動、キューバ危機等など

危機に必要なのは、計画？即興？それとも運？
危険（リスク）を、機会（チャンス）へ
危機とその対応メカニズムを社会科学で解明

危機対応学
『危機対応の社会科学』
Social Sciences of Crisis Thinking

希望学から危機対応学へ
「今や、将来に一切の危機のない世界を想定するのは、難しい。
むしろ、今後起こり得る危機に際し、何とか対応出来るという見通しや手応えの得られる社会に、希望は生まれるはず。」
（東京大学『淡青』2016年9月号）

釜石での公開シンポジウム（2016年11月）



東京大学への予算申請資料の一部（2016年）

Social Capital
Human Network
Risk Communication
Resilience
Diversity
and more

危機対応とは「平常」から「緊急」へのスイッチ

緊急時3原則
「想定にとらわれない」
「つねに全力を尽くす」
「率先して行動する」
⇔釜石避難3原則

ON

平常時3原則
「想定を心がけ」（準備）
「つねに余力を」（遊び）
「配慮して行動」（信頼）
⇔日頃の行動が重要

**ローカル・アイデンティティの再構築、
希望の共有、地域内外のネットワーク**

『はしれ、上へ！』
指田　和（文）・伊藤秀男（絵）、ポプラ社

危機対応に関する国際共同研究・地域協働拠点の構築

環太平洋共同研究・政策提言
グローバルネットワーク
『メリディアン180』
（28カ国650名研究者等参加）

「東京大学拠点」創設

- 東京大学の学問的成果を広範・迅速に世界へ発信
- 多言語（日・英・中・韓）同時デジタル出版プラットフォームの活用

アクション1の①　国際的に卓越した研究拠点の拡充・創設

世界と共に

社会科学研究所

全所的プロジェクト「危機対応学」
（2016年度～19年度）
様々な危機の発生メカニズムと対応策を
社会科学の観点から所を挙げて究明

【検証テーマ（例）】
事前対応と事後対応　ミクロ対応とマクロ対応
危機確率と危機意識　危機事態と危機言説

【取り組むKPI】

（1）学術論文
（2）基調・招待講演
（3）公開講座
（4）共同研究学術書籍
（5）社会還元に向けた一般向け著作

（全所的プロジェクト「希望学」は釜石での成果など10冊刊行）

地域と共に

岩手県釜石市に
産学官民協働により

「危機対応研究センター」設置

- 2005年度来、市民・関係者と研究・協働活動継続
- 大学の復興支援として「東大釜石カレッジ」担当
- 震災・津波の記憶継承
- 将来の危機対応の方策を研究・提言及び社会還元

アクション3の①　学術成果の社会還元
アクション3の②　産学官民協働拠点

東京大学社会科学研究所
研究活動を支える3つの層と3つの柱

研究活動の3つの柱

共同研究の推進

研究インフラの構築
SSJデータアーカイブ
日本研究の図書収集
アジア研究の図書収集

調査の実施
社会調査（パネル調査）
地域調査（釜石市・福井県）
外国調査（中国・韓国・欧米）

研究活動の3つの層

全所的プロジェクト研究
2005～2008「地域主義比較研究」「希望の社会科学」
2010～2013「ガバナンスを問い直す」
2016～　「危機対応学」

グループ共同研究
ディシプリン型
ディシプリン横断型

専門分野基礎研究
スタッフ各自の専門研究

危機対応に関する国際共同研究・地域協働拠点の構築（全所的プロジェクト危機対応学）

国際共同研究ネットワーク

メリディアン180「東京大学拠点」
東京大学の成果を国際発信

国際的に卓越した研究拠点の拡充・創設

沖縄での国際会議WS

地域の危機克服に貢献 大学全体の活動を可視化

指定国立大学目標にも合致

東京大学地域貢献「見える化」事業

岩手県釜石市と地域協働

「危機対応研究センター」設置
危機対応の方策を研究・提言などを実施

学術成果の社会還元
産学官民協働拠点

釜石での覚書調印

社会科学の総合知を備えた研究者養成事業

- 大学院修了者
- ポスドク

若手研究者
2つの不安定
①所得の不安定
②雇用の不安定

- 学振特別研究員
- 海外博士候補生

など

雇用

- 助教・特任助教・特任研究員
- 学術支援専門職員

社会科学研究所

参加

OJTを通じた研究者としてのスキル養成
社研研究プロジェクトへの参画、社会調査データ収集、加工、二次分析、研費調書作成セミナーなど

分野横断的な研究発表機会
社研セミナーや若手研究員の会への参加など

参加

受入

- 客員研究員
研究スペースの提供
研究の助言

顕著な業績
ホームページに掲載。
過去6年間に論文・学会報告243件

※過去6年間に外部資金90件採択、基盤C若手研究Bの採択率71%

大学・研究機関への研究者としての就職

北海道大学／北海道教育大学／東北大学／富山大学／筑波大学／流通経済大学／亜細亜大学／学習院大学／慶應義塾大学／国際基督教大学／玉川大学／東海大学／東京経済大学／早稲田大学／中国社会科学院近代史研究所など

※過去6年間に約90名が就職

危機対応学への期待と懸念
：予算ヒアリング評価から

- 「危機対応」事業は大学全体の強みを伸ばす潜在力が期待できる。
- 「危機対応」は発展性のあるテーマ。東京大学が全体として取り組むべき重要な仮題の一つ。
- 指定国立、SDGS（注：国連による「持続可能な開発目標」）との関連性をつけてアピールできる事業。
- 危機対応に関しては理系（工・医等）との連携による文理融合も検討されたい。
- 東京大学が行うべき知のプロフェッショナルを社会科学面から支える根幹事業であり、積極的に推進すべき。
- 危機対応研究センターの活動は、大学における研究等の成果を社会還元する上でも重要であろう。

危機対応学への期待と懸念
：予算ヒアリング評価から

- 危機対応学の内容が多岐に亘りすぎていて、既存の研究と両立できるプロジェクトなのかやや疑問が残る。もう少し絞ると発信力も増すのではないか。
- 危機対応研究は魅力的だが、具体的にどのような連携を行っているか/行う予定か、少しわかりにくい。
- 「危機対応学」のなんたるかが明確でなかった。各論はとにかく総論はあるのだろうか。
- ２次配分の増額要求になっており、適切な要求になっていない。
- 「危機対応学」における「メリディアン180」の位置づけがよくわからない。
- 研究者養成は内向き、危機対応学もやや内向きな印象。

ワークショップ（2016年度）の印象・感想

- 社研メンバーしか知りえない、もしくはメンバーが特によく知っている個別の危機対応事例がある。しかもその「裏話的対応プロセス」の話と専門的知見から評価は、広く社会に提示する価値と意義がある。
- 分析は歴史的考察、データによる考察、事例研究、理論的考察など多彩。
- いかに危機に効率的・効果的に対応するかとあわせて、危機に対する公正な対応とは何かというのは、社研メンバーの関心が高い印象。震災時には、危機における公正性という困難な問いに直面。

- ただし全体を貫く視座や論点はいまだ固まっていないのも事実。

2016年度の所内ワークショップを通じて

- それぞれの分野で、それぞれが考える「危機」と「対応」の事案が比較的豊富に存在することを確認(例：HPに記載されたエッセイなど）

- 個別のテーマは、専門分野を超えて、興味深く、かつユニーク。特に「実は知られていない社会の危機」「知っているようで知らなかった社会の危機」にいかに対応してきたかという知見は、各自に有益な知見を提供

・成果を個々の考察をアンソロジーとしてまとめ、帰納法的に「危機対応の社会科学」とは何かを意味づけるのは、一つの方向性

⇔だとすれば、アンソロジーの執筆を2017年度中に関係者へ依頼し、2018年度以降を帰納法的考察に当てる期間にすべきではないか

危機対応の社会科学とは、そもそも何ぞや

- 個別事例を超えて、危機対応学に関する、一般的・普遍的な前提と内容を演繹的に考察する必要はないか

- 危機対応学は、普遍的な分析枠組みとして「事前と事後」「個別と集団」「確率と意識」「実態と言説」といった機軸を提案。ただしこれらについて、煮詰まった議論は未だなされていない

- 別の言い方をすれば、危機対応学の理論的考察を検討すべきでないか（例：「希望」とは何か、「ガバナンス」とは何か。）

新キーワードの必要性（例）

- Social Preparation (社会的準備）⇔将来起こる危機に対応するための基盤形成
- Social Intuition (社会的カン）⇔不完全な情報の下で対応の方向・程度を決定
- Social Improvisation (社会的即興）⇔有限な資源をもとに未知への創造的対応

⇔以上の用語は、ネット検索ではみつけられず。危機対応の社会科学である以上、個人だけでなく、社会としての対応局面を考えたい。

⇔危機対応学が一定のメッセージを持つためには「危機対応」とかかわる重要なキーワードを提案普及することが重要（例：「希望」の隠れテーマは、

「挫折」「物語」「つながり」等）。Social Capitai, Resilience等で停まっていてはダメ。

危機の社会的対応に関する段階論（案）

第Ⅰ段階	共感形成	「みんな、同じ危機に直面しているんだ。」
第Ⅱ段階	共通認識	「みんなにとっての問題だ。何とかしようよ。」
第Ⅲ段階	共通展望	「みんなでこう取り組めば、何とかなるかも。」
第Ⅳ段階	協働行動	「そうなら、みんなでやってみよう（やってみた）。」
第Ⅴ段階	方向共有	「みんなでやったら、こうなった。次はどうする。」

「危機」と「対応」の分類案

		対応の分類		
		放置型	復帰型	創造型
危機の分類	想定内			
	想定超			
	想定外			

「危機」と「対応」の分類例

		対応の分類		
		放置型	復帰型	創造型
危機の分類	想定内	少子化	戦争回避	技術革新
	想定超	財政赤字	震災復旧	震災復興
	想定外	不治の病	突発事故	？

原発事故

「なぜ、今、危機対応学なのか」という問い

- 少子化の進展など、ある程度は想定内危機であったにもかかわらず、事実上、放置的対応に終始したことの反省と教訓の獲得が、今こそ求められているのではないか
- 東日本大震災など、想定超危機に直面した際の、国策としての復帰型対応（現状復帰原則に基づく復旧）と、住民・世論による創造的対応としての復興（人口減少社会の新コミュニティ）への期待との相克
- 不確実性や不透明感が社会に増すなか、想定外危機が起こるのではないかという個々人の漠然とした不安と、直面したときに「どうすればよいのか」という対応策の模索

危機対応の分類と4つの軸

		対応の分類		
		放置型	復帰型	創造型
危機の分類	想定内			
	想定超			
	想定外			

上記の分類に、4つの軸【事前と事後】【個別と集団】【確率と意識】【事実と言説】を組み合わせることで危機対応学を立体的に浮かび上がらせる。

危機対応学：2017年以降の活動（1）

- 外部ゲストを招いた公開型の危機対応学ワークショップを開催。
- 2016年度に実施した「将来に向けた防災意識・行動・価値観調査」に関する計量分析。有田さん中心にWG、社研の計量分析者にも協力呼びかけ。これだけで一冊の本になる可能性（『自然災害の危機対応学』（仮題））
- 「危機対応研究センター」をベースとした危機対応学・釜石調査の実施。震災前後の調査研究を踏まえ、危機対応という観点から釜石の震災前後から現在を社会科学的に考察。2019年度に釜石調査をまとめた一冊。
- メリディアン180と連携し、「国際的視点からの危機対応学」に関する書籍出版の企画。ユニークな視点を持つ海外の執筆者にアンソロジーへの寄稿を要請。日本語出版につなげると同時に、2019年度には、そのエッセンスを電子書籍として日・英・中・韓語で同時出版（予定）。

危機対応学：2017年度以降の活動（2）

- 社研研究者に、アンソロジーへの寄稿協力依頼。そのための企画書と文章例を運営委員会で作成。2017年度末までに提出。寄稿内容をグループ化し、2018年度に寄稿者同士で考察。
- 保城さんをリーダーに「危機対応学（国際的研究グループ）」を所内外研究者と立ち上げ。2018年度に世界社会科学フォーラムで報告後、成果を2019年度に取りまとめて出版。
- 東京大学地域貢献「見える化」事業の実施。学内で地域の様々な危機への対応を活動している教員・学生の活動を資金面で支援。かわりにその活動内容を報告してもらい、危機対応学の成果に組み込む。指定国立大学としての東大に貢献することで、社研の財源と存在意義の確保。

アンソロジーの構想案

- 一般読者を想定（専門的用語はできるだけ避ける）
- 10000字程度前後（本文）
- できるだけ具体的な事例を盛り込む
- 一般の読者が、あまり（まったく）知らなかった内容を極力含める
- 執筆は、社研とメリディアン180のメンバー等に対して依頼
- 執筆者は関連する内容として【事前と事後】【個別と集団】【確率と意識】【実態と言説】【その他】の少なくとも一つを選び、それを執筆後の帰納法的考察の整理に用いる
- 執筆者は危機対応の9分類（3×3）のうち、いずれに焦点を当てるかを選択（例：「想定内危機・創造的対応」など）
- アンケート分析や釜石調査、国際研究等とは区分（複数執筆可）

危機対応学とは△△である。

危機に対応するとは〇〇することである。

危機対応力を高めるには□□が求められる。